ガラスの壁

ガラスの壁

芝木好子

新潮社版

ガラスの壁

昭和五十九年九月一日　印刷
昭和五十九年九月五日　発行

定価一三〇〇円

著者　芝木好子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部〇三―二六六―五一一一
編集部〇三―二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・植木製本株式会社
© Yoshiko Shibaki, Printed in Japan, 1984

ISBN4-10-309804-X　C0093

目次

第一章　ガラスの壁　5
第二章　湖北残雪　57
第三章　父の像　113
第四章　微光　147
あとがき　195

装画　三岸節子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ガラスの壁

第一章　ガラスの壁

超高層ビルディングの真下に立って上を仰ぐ時、瑤子はくらっとしながら興奮をおぼえる。切り立った尖塔を見るような、空につき出た建物に惹かれる。二つの高層建築が尖端で対峙したところなどはとりわけ好きで、鋭い角度や機能性に目を奪われてしまう。この建物の中の空間へ自分の夢をそそぎこんだら愉しいだろうと思う。フロアの彫刻とか、ガラスと金属のシャンデリアとか、ステンドグラスとか。

新宿の超高層ビルディングに瀧田設計研究室があって、時折ここの仕事を貰うようになった。大きな額縁ほどの包みを抱えてエレベーターの前まできた彼女は、うしろから声をかけられた。

「瑤子ちゃんじゃないか」

振りむくと、九年前に父と離別した母の弟の敬叔父が立っていた。何年ぶりだろうか。瑤子は咄嗟にどうしたものかと思った。敬も珍しそうに目をあてている。早春の冷たい風の下に短い外套と細いスラックスで立っている彼女に、敬は過ぎた歳月を数えているようであった。

「しばらくだね、元気か」

「なんとかやってます」
「仕事をしているそうじゃないか」
久しぶりだし、お茶でもどうか、と誘われると、断わるのもおかしい気がした。二人は地下の喫茶室へ行った。広告会社に勤める彼はこの建物の中に取引先があって、よく来るという。出会ったのは偶然ではないかもしれない。以前はあまり丈夫でなかった彼女が人並に働いているのをみて、彼は安心したようだった。ずっと気にしていた、と呟いて、血縁の娘をしみじみ見ながら、二十三歳だったころの彼女を思い合せていた。
「その後、お父さんは元気か。君は結婚はまだか」
瑤子は考えてもいないことで、苦笑した。
「結婚、しませんねえ」
「しかし、もう年だろ。それとも結婚は親で懲りたか」
敬は冗談にしかけて、すぐ真顔になった。瑤子は黙っている。父との二人暮しでどうということもなかったが、叔父の顔を目の前にするといやでも別れた母を思い出した。この歳月思い出さないといえば嘘になるが、忘れるようにつとめてきたし、懐かしいという感情は正直なかった。その代り月日が経つと、嫌いとも疎ましいとも思い続けた気持が薄れて遠い存在になっていった。
「君は昔からお父さん子だったが、いつまでもひとりというわけにゆかないな。立子姉さんが聞いたら気にするよ」
敬は黙っている瑤子を前にして、話題をかえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「建築事務所の仕事というのはなにかね」
彼女の抱えてきた包みには模型が入っていた。瀧田設計研究室では建物に付随した装飾や、照明を、若い専門家に試みさせることがあった。
「それはどんなもの」と敬は聞いた。
「壁の装飾ですわ。ガラスを使っています。京都の漆器の老舗の新しい建物ですから、蒔絵を使う壁飾りも考えられたようですけど」
「京都の老舗がガラスをね」
「まだ通るかどうか分りません。初めのアイディアはよかったのですけど、色調が瀧田先生のお気に入らないんです」
「瀧田というのは超高層建築をやる人だろ」
敬はこの建物の建設グループに瀧田秀信が加わっていたのを知っていた。あれから九年経つうち病身でひよわかった女子学生の瑤子が独り立ちしている。そういえば彼女の父の篠原隆吉も大学を定年で退いたはずだが、どうしているかと気になりながら、馴々しく聞けない。彼には姉のことで何やらうしろめたさがあった。篠原夫婦の別れはどちらが悪いとは言えないが、出ていったのは立子のほうであった。彼女は出てゆくとき瑤子の弟の守男をつれていった。一家は二つに割れてしまった。その時守男は十七歳で、高校から大学へゆく前後であった。
「君は母親や、弟のことを聞かないね」
運ばれた珈琲を飲みながら、敬がそういうと、瑤子は皮肉な顔をした。去った母がその後再婚

したのは知っているが、それ以上知る必要もなかった。忘れたと思いながら、心底に地熱のような痛みと憎しみがくすぶっていて、再婚した母を許していなかった。ただ叔父の前では忘れた顔をしていたかった。

「一ぺん母親に会う気はないか。再婚して、張りのある暮しをしているが、このところ身体の調子が悪くて検査をするために入院している。見舞ってもらえば丁度いい機会だと思うな」

「どこが悪いのですか」

「胃の具合が悪くて、胃潰瘍ではないかと気にしている」

敬はそう言ったが、瑤子はすぐ見舞う気になれなかった。仕事が思うようにゆかなくて、ここ一週間ほど半徹夜で色を出して模型にまで漕ぎつけたが、自信がなかった。これ一番という決め手がなかったから、瀧田に褒めてもらうことなど覚束ない。この仕事がだめとなると次の仕事は考えられないし、どうしてよいか分らない。絶望的である。冴えない気持のまま、彼女はつまらない時に叔父に会ってしまったと思った。

「仕事を仕上げて、京都へ行かなければなりませんから」

「会うのはあとでもいいよ。守男君も京都でなんとかやっているのを知っているか」

守男はいま京都の嵯峨野に住んでいる。なんでも椿寺のそばらしい、と敬は言ったが、瑤子も前に弟から便りをもらったきりであった。彼女は弟にも深く触れようとしないまま、時計を見て立上った。

彼らはエレベーターの前までゆき、そこで別れた。敬は彼女に名刺を手渡して連絡してほしい

と言った。立子姉さんもよろこぶだろう、君の仕事のことは何かで見て知っているようだ、というのを耳の端で聞きながら、瑤子は開いたエレベーターの中へ吸いこまれていった。小さな箱の中で彼女は宙をみていた。母に関る肉親は捨てたし、向うからも絶縁してきたはずであった。残ったのは父だけである。長い歳月が経ってお互いにぼけた感情で再会して、口先で和解をしてなんになるだろう。同性の母を思いうかべるだけで、見舞う気にもなれなかった。それでいて入院していると聞くと妙に不安にとらわれた。

高層ビルディングの二十九階は下界からははるかに遠い。オフィスの並ぶ廊下を歩きながら、この空中の楼閣もやはり人間の触れあう場だと瑤子は思った。叔父に出会ったのもそうかもしれない。九年間も身内の誰にも会わずに父とひっそり暮したのがふしぎなのだ。彼女はその暮しが身について、女らしく着飾って出歩いたこともないし、親しい男友達もいなかった。結婚ねえ、と我が身に問いかける。母が二度も結婚しているのに、と皮肉が湧く。

瀧田設計研究室の扉を押す時、彼女の顔は緊張でまたすっと表情が変る。模型の包みを確かりと抱えて、今日を生きるために真剣な眼差になる。研究室は受付があって、奥は広い仕事場になっている。受付の少女が今日は瀧田先生は出張、という。彼女は奥の仕事場へ入っていった。男たちが数人あたたかな室内で上着を脱いで仕事をしている。壁に新しい都市計劃の地図が張り出してあって、寸暇もない仕事ぶりである。瀧田の不在に瑤子は失望しながらほっとしている。模型の色調に自信がない。瀧田の代理をする和倉が、御苦労さん、と言った。彼女は狭い応接室へいって模型の包みを開いた。待つ間、窓の外へ目をやると今日は薄曇りで広々とひらけた都会の

鳥瞰が霞んで見える。
父は今日の叔父との出会いをなんというだろうか。隠すのもいやだし、告げるのも億劫だった。彼女が独り身でいるのを叔父は父がいるから、と考えたに違いないが、今日まで父が独りなのも嵩高な娘がそばにいるからかもしれないのだ。ぼんやりしていると、和倉が入ってきた。ソファの上に立てかけた模型図に目を当てている。二十分の一の模型で、彼女は特製のボードと紙で苦心して浮彫を作った。実物は煉瓦一個ほどの大きさのガラスの物体を壁一面の広さに横段に並列したもののはずで、模型には彩色してあった。一枚の絵と見なして、上部の数段は朝明けの陽の白さを、そこから下へ黄に、橙に、浅葱に、灰色に、黒と、段々に色が濃く裾へ流れてゆく。これに光線を加えるのである。
「色がこの前より出てきたね。テーマはなんだっけ」
と和倉はしばらく凝視したあとで聞いた。
「『曙』です」
瑤子はおこがましい題名という気がしたが、はにかんでいられなかった。ガラスの浮彫には当然ながら凹凸がつけてあった。
「なんとか見られるようになったでしょうか」
「君はこの前アクリル板とアルミでおもしろい、でこぼこの鏡を作ったろ。あれは壁に取りつけると映像がゆらゆら揺れてユーモアがあった。君はおどけているのかと思うと、今度は真向から美と取組むわけだ」

「一ぺんガラスのカンバスに色を塗ってみたかったんです。塗るうちにガラスという材質が消えてしまって、光る絵が見えてくれば良いと思って」
「そこのところをうちの先生も期待するわけだ」
　和倉はそれ以上良いとも悪いとも言わないまま、預っておく、と言った。瑤子の気持は少しも安らがない。瀧田の気に入らなければどうなるのか。京都の注文主に見せるのは来週のはずである。模型で意をつくせなければ壁面の原寸通りに色を塗ってみてはどうか。更に色を深めてみようと思う。和倉は気の毒そうな顔をした。それだけの効果があるかどうか分らない。
「無駄で元々ですし、描いてみれば色のアイディアも生れるかもしれませんから」
「やってみるか」
　和倉は模型の結果はすぐ知らせるから、と言った。仕事場へゆくと若い一人が都市計劃の模型を作っているが、瑤子にはどこの都市か分らない。瀧田が大学教授であった頃彼女も講義を聴いたが、その時分から大きな仕事をする反面、瀧田は小さな装飾や照明にも最後の現場まで立会うことで知られていた。思いきって流動するものを描いてみよう。父をおどろかすように、瀧田をおどろかそう、と決めると、ようやく心が自由になった。そろそろお茶の時間で、受付の少女がお茶を淹れるのに瑤子も手伝った。今日のケーキは彼女の差し入れであった。若い建築家たちが大きな図面を引いていると、彼女の視野もひらける。高層ビルディングは日に日に伸びてゆく。
「超高層ビルは何階以上を言うのでしょう」
「二十階以上だろう。一番効率の良いのは何階建だと思う」

と和倉が瑤子を試した。
「さあ、九階か十階」
「そう九階なんだ。しかし高層なら高層なほどアピールする価値がある。九階じゃなにも見えないが、二十九階だと東京湾から遠く房総半島まで見えて、四季の眺めも、朝晩のけしきもすばらしいし、気分が高揚するわけだ」
「和倉さんは外ばかり見ているんだな」
一人がからかうと、和倉はそうだ、と頷いた。
「瀧田先生も時々窓の外をじっと見てるな。超高層はこの通り建ってきたが、次はなんだ。住宅圏が可能かどうかだ」
瀧田教授は東京駅に二十四階建のビルディングが建つのを知った時、超高層建築の曙を感じた、と語ったことがある。それから専門の学者たちと構造学の研究を三年間続けた。霞が関ビルディングはその成果の現れだったという。こういう話題の中にいるとき、瑤子は我を忘れる。それらの容れものに光や色の飾りをつけるのだ。空間は室内やロビーを出て無限にひろがってゆく。彼らの作る模型は今夜徹夜で仕上げて、明日飛行機でどこかの都市へ持ってゆくらしい。スチレンボードで作る広場の公会堂がよく出来ている。
しばらくして瑤子は研究室をあとにした。駅の近くのデパートへ寄って漆器売場へゆき、京都の漆器の老舗西芳堂の塗物のありかをたずねた。特選売場に五つ組の椀がある。椀は黒漆に紅葉の模様ですばらしいが、高価すぎる。ようやく一対の箸を見つけた。黒塗と赤塗で、しっとりと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com